

令和3(2021)年度 頑張る学校・地域！応援プロジェクト 全県フォーラム

学校と地域の連携推進モデル事業実践校 紙面発表

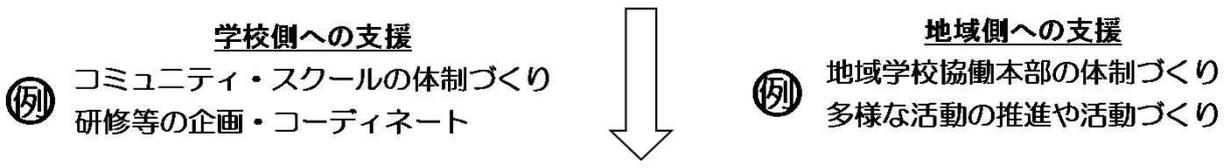
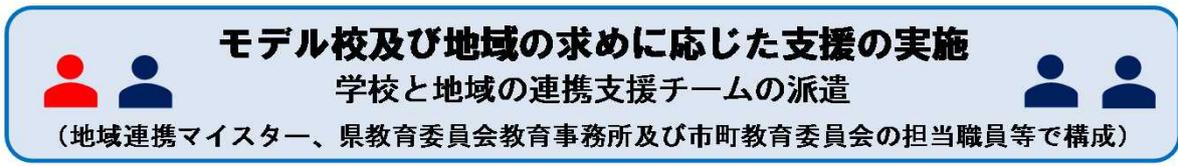
■事業概要 頑張る学校・地域！応援プロジェクト
「学校と地域の連携推進モデル事業」について P 1

■実践事例

河内教育事務所管内	宇都宮市立御幸小学校	P 2
	上三川町立上三川中学校	P 3
上都賀教育事務所管内	鹿沼市立粟野中学校	P 4
	日光市立今市小学校	P 5
芳賀教育事務所管内	市貝町立市貝中学校	P 6
	芳賀町立芳賀中学校	P 7
下都賀教育事務所管内	壬生町立稲葉小学校	P 8
	小山市立小山中学校	P 9
塩谷南那須教育事務所管内	さくら市立熟田小学校	P 10
	那珂川町立馬頭東小学校	P 11
那須教育事務所管内	大田原市立湯津上中学校	P 12
	那須塩原市立大貫小学校	P 13
安足教育事務所管内	佐野市立葛生小学校	P 14
	足利市立東山小学校	P 15



各教育事務所単位で、学校と地域との連携・協働に関する知見を有する方を「地域連携マイスター」として委嘱し、社会教育主事・指導主事等をメンバーとする「学校と地域の連携支援チーム」を編成します。併せて、学校と地域の連携推進モデル事業実践校（モデル校）を指定し、学校と地域の求めに応じて支援チームを派遣することにより、体制づくり、連携活動、研修等の支援を行います。



学校と地域の連携推進モデル事業実践校（モデル校）及び地域



学校と地域の連携推進モデル事業実践校

宇都宮市立御幸小学校

支援のねらい・目指す姿

学校と地域コーディネーターの良好な関係を基に、地域人材のネットワークを構築するとともに、現在行っている地域学校協働活動の更なる充実を図る。

会議・支援チーム構成

・連携推進会議委員 10名 ・連携会議委員 33名 ・学校と地域の連携支援チーム員 3名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

地域フォーラム「みゆきっ子について語ろう」では、保護者と教職員、地域関係者が、子どもや御幸地区の良いところについて、活発に意見交換を行った。そして、熟議をとおして「この学校の子どもや、この学校に協力したいこと」を共有した。

地域フォーラムにおいて、地域のあいさつ運動実施の提案がなされ、学校と地域、保護者、児童会によるあいさつ運動の展開につながった。

▶ 連携事業

モデル事業として行った「トイレ清掃スペシャルデー」や、「サクラ草プロジェクト」の充実を図るため、目的や意義等を学校と地域が共有し、事業の更なる充実を図った。

学校と地域の思いが共有されるとともに、新たな地域住民が本活動に参加するなど、活動の広まりが見られた。



地域フォーラム

▶ 広 報

学校や地域の実情を踏まえた新たな取組の概要等について広報紙にまとめ、保護者へ配布したほか、自治会で回覧を行うなど、広く周知を図った。

事業概要や活動内容などを広く周知したことにより、保護者を含めた地域住民の地域学校協働活動に対する関心が高まった。



あいさつ運動

連携推進のポイント

- ・地域学校協働活動を活発化させるために、共通理解を図る時間を確保すること。
- ・既存の活動の見直しを行い、内容の充実を図ること。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

上三川町立上三川中学校

支援のねらい・目指す姿

地域学校協働活動を推進するため、学校と地域の目標の共有、地域人材の多様なネットワーク構築等の実績を踏まえ、コーディネート機能の充実及び体制の強化を図るとともに、継続した事業実施に繋げていく。

会議・支援チーム構成

・連携推進会議委員 10名 ・連携会議委員 15名 ・学校と地域の連携支援チーム員 3名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

校内研修では、学校支援コーディネーターをパネリストに迎え、活動内容、生徒や地域に対する思い及び将来への願いなどについて、教職員に伝えた。

教職員は、多くの地域人材が活動に関わることにより生徒に良い影響を与えることや、コーディネーターの思いに気付き、地域との協働について気持ちを新たにしていた。

▶ 連携事業

学校資源である梅を使ったジュース作りや、学校農園を活用した野菜作りなどの活動に、学校支援ボランティアが主体的に取り組んでいる。

梅ジュースの効果的な活用を図るため、専門家からの聞き取りを行った。さらに、学校支援コーディネーターのネットワーク等を利用したことにより、本活動に関わる地域のボランティアが増えた。



市貝町観音山協議会からの聞き取り

▶ 広 報

モデル校としての取組概要について広報紙にまとめ、保護者や地域関係者に配布し、広く周知した。

上三川中学校ならではの取組を周知したことにより、「地域学校協働活動」に対して関心を持つ地域の人が増えた。



梅と氷砂糖の漬け込み

連携推進のポイント

- ・中学生と地域関係者、教職員が協働する場を創出すること。
- ・学校資源（上三川中学校は梅）の効果的な活用を図ること。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

鹿沼市立栗野中学校

支援のねらい・目指す姿

学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の意義や目標について、全職員及び保護者・地域住民等の理解促進を図るとともに、地域学校協働活動の充実に向けた推進体制を整備する。

会議・支援チーム構成

・連携推進会議委員 17名 ・連携会議委員 27名 ・学校と地域の連携支援チーム員 6名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

学校運営協議会の導入に向けて、芸術による地域づくりを行う既存組織（「AWANO 夢咲くアートフェスティバル実行委員会」及び「オープンスクール実行委員会」）を基に、PTAを中心とした委員が話し合ったり、公民館職員や教職員が地域学校協働活動の研修を進めたりした。

芸術家でもあるコーディネーターを中心に地域住民が主体となって、学校の授業に支障の出ない形のイベントを実施するよう計画することができた。持続可能な事業を創造することができた。

▶ 連携事業

鹿沼市地域活動支援課の進める「地域の夢実現事業」との連携を図った地域活動「AWANO 夢咲くアートフェスティバル」と共催で「オープンスクール」を実施した。地域住民や公民館職員の協力を得て事業を行った。

コロナ禍のため、当初の計画より規模縮小となったが、地域の幅広い方々の理解と協力の上で実施できたので、持続可能な事業にする必要性等を考えることができた。

▶ 広報

学校運営協議会の理解促進と中学校の地域と関わる教育活動を広報リーフレットにまとめ、地区内全戸へ配布した。

それによりコミュニティ・スクール導入に関する意識の醸成が図られた。また、事務局によって、「AWANO 夢咲くアートフェスティバル」についてのホームページを公開し、地域住民の郷土愛の高まりにも寄与することができた。



オープンスクール
（芸術家による鑑賞授業・現中学校）



AWANO 夢咲くアートフェスティバル
（開会行事・旧栗野中学校前）

連携推進のポイント

- ・既存の教育活動と幅広い関係者及び地域行政が連携すること。
- ・コーディネーターを中心とした「芸術」を核とした幅広い連携活動を創造すること。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

日光市立今市小学校

支援のねらい・目指す姿

既存組織（「地域教育協議会」）を生かし推進体制を整備する。また、保護者や地域の方々から、教育活動の成果や課題を聞き取る機会を設定し、学校教育目標やその実現に向けた教育課程編成方針を地域と共有することをとおして、今市小学校のよりよい学校運営協議会の在り方について共に考える。

会議・支援チーム構成

・連携推進会議委員 17名 ・連携会議委員 41名 ・学校と地域の連携支援チーム員 7名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

参加対象者を分けて、「学校運営協議会と地域学校協働活動」について複数回研修を行うことで、関係者の立場に応じた制度の理解を図り、地域協働活動の充実の必要性を考える機会を作ることができた。また、既存の活動を地域づくり活動に発展させることの意義について、理解を深めることができた。

▶ 連携事業

主に2つの事業を行った。

1 防災訓練キャンプ（主催：ICM今小おやじの会）

「おやじの会」にて目標、内容等の検討を行い、6学年の児童（希望者）が地域の方々と共に、非常時を想定しての防災訓練を行い、生きる力の育成を図った。（心肺蘇生法とAED使用体験、ドラム缶風呂・サウナ風呂体験、青竹炊飯、宿泊体験、魚の調理等）

2 オータムスクール（主催：地域教育協議会）

地域コーディネーターを中心に、地域の方々の参画のもと、10を超えるブースで様々な体験活動（雑巾リレー、手話を使った音楽教室、玩具作り、エプロンシアター等）を実施した。

保護者と地域の方々が主体となり、学校が協力する立場として、準備・運営を行った。ボランティア参加者が主体的に子ども中心の活動を企画・充実させたことで、関係者のネットワークがより強固になり、幅広い連携に広がっている。また、地域の方々をつなげる児童の育成に結びついている。

▶ 広報

めざす学校像やコロナ禍に負けず地域の方々で行った様々な教育活動をホームページで発信したり、PTA及び地域の方々、地域教育協議会委員や公民館へ、広報紙を配布したりした。学校運営協議会への理解が深まり、地域学校協働活動に対し、意識の高揚が図られた。



防災訓練キャンプ
（薪割り）



オータムスクール
（弓矢作り）

連携推進のポイント

- ・大人が楽しみながら我がふるさとの学校であるという意識の高揚・醸成を図ること。
- ・「日光市の未来は今市小から」というプライドを持ってもらうこと。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

市貝町立市貝中学校

支援のねらい・目指す姿

地域連携に対する教職員の意識を醸成し、学校と地域との連携事業を実践するとともに、地域の支援組織構築のきっかけづくりとする。

会議・支援チーム構成

・連携推進会議委員 10名 ・連携会議委員 8名 ・学校と地域の連携支援チーム員 7名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

連携推進会議では、既存の学校行事や授業等の中で、地域と協働してできるものを洗い出すとともに「地域とともにある学校づくり」についての研修の機会について話し合った。

研修会には、町内各小学校や学校支援ボランティア、PTA役員など多くの関係者が参加した。「地域で子どもを育てることや、子どもの教育に関わることの大切さが分かった」など、地域連携に向けての意識を高めることができた。



様々な立場の方が参加した研修会

▶ 連携事業

連携会議の場で、図書ボランティアと生徒が協働できないかという提案があり、図書委員の生徒との交流を行った。

自己紹介を行うとともに、お互いがどのような活動をしているか発表し合うことで、理解を深めた。和やかな雰囲気の中で、今後やってみたいことを挙げたり、新刊本の受入れ作業を一緒に行ったりすることができた。



ボランティアとの新刊本の受入れ作業

▶ 広 報

町教育委員会と学校が協働し、本事業の背景や効果、事業の内容を示した広報紙を作成した。また、本事業での連携会議や研修、連携活動に関する情報を、学校だよりや学校ホームページに掲載して広報した。

広報紙や学校だより、学校ホームページを活用することで、保護者の閲覧機会を確保するとともに、より多くの地域住民への周知を図ることができた。

連携推進のポイント

- ・地域コーディネーターやボランティアとPTA役員をつなげ、顔の見える関係を築くこと。
- ・生徒がボランティアの活動内容を知り、ボランティアと協働すること（委員会活動に対する生徒の意識の向上）。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

芳賀町立芳賀中学校

支援のねらい・目指す姿

新型コロナウイルス感染症により、地域の方々とつながる機会が減ってしまったため、学校と地域のつながりを新たにつくり、その成果として花火を打ち上げる「プロジェクトH」を立ち上げた。生徒会役員が直接学校運営協議会に参加して協力を依頼するなど、地域と連携・協働しながら活動を進める。

会議・支援チーム構成

- ・連携推進会議委員 10名
- ・連携会議委員 10名
- ・学校と地域の連携支援チーム員 7名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

学校・地域双方でできることについて話し合い、花火を打ち上げるために、アルミ缶を回収して収益を上げることにについて協議した。

連携会議には生徒会役員も出席し、活動の具体策について話し合いを行うことで、参加した委員から多くのアドバイスが得られた。また、学校運営協議会の協力で、町民に働きかける機会を持つことができた。



生徒会役員も参加した連携会議

▶ 連携事業

生徒会役員が中心となって、PTA役員や学校運営協議会委員などに説明、協力を依頼するとともに、花火業者との打合せにも参加した。回収作業・チラシ作成も生徒が主体的に行った。

生徒が「プロジェクトH」に主体的に取り組み、地域の様々な人たちと連携・協働することで、コロナ禍でもつながりづくりを進めることができた。



PTA役員とのアルミ缶回収

▶ 広 報

アルミ缶の回収場所に回収方法のパネルやコンテナを設置し、気兼ねなく協力してもらえようにした。どれくらいのアルミ缶が回収されたかの結果を月ごとに公表し、学校の玄関に掲示した。

学校運営協議会を通じて町内の小学校にもアルミ缶回収が広がり、相当数が中学校に集まった。また、学校運営協議会の助言から町の広報紙、ケーブルテレビ、自治会の回覧板などを活用したことで想像以上の回収数となった。地域の方の協力に対し、感謝の手紙を回収場所の看板に掲示した。

連携推進のポイント

- ・生徒の主体的な活動は、「生徒を核とした地域づくり」につながる。
- ・学校運営協議会に生徒が参加することで、大人同士のコミュニケーションも活性化すること。
- ・地域の中に「地域の子を学校と地域で共に育てよう」という雰囲気醸成すること。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

壬生町立稲葉小学校

支援のねらい・目指す姿

「社会に開かれた教育課程」を実現するために、地域とともにある学校づくり（コミュニティ・スクール）を目指して、子どもたちの豊かな人間性や主体的に考える態度を育むとともに、子どもの学びを支える地域の教育力の向上を図る。

会議・支援チーム構成

- ・連携推進会議委員 6名
- ・連携会議委員 7名
- ・学校と地域の連携支援チーム員 5名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

地域学校協働活動を推進するための方策について、既存の学校支援の仕組みを基盤とした、連携・協働の組織作りに関する協議を行った。また「これからの学校と地域のあり方」について研修を行った。

教職員、関係者の協働活動への理解が進むとともに、新たな地域人材や地域資源の拡充につながった。



モデル事業実践校での研修

▶ 連携事業

学校と地域の各々の役割分担を明確にし、協働のための体制を整備し、稲葉地区の農業や特産物、史跡、歴史などに主眼を置いた、地域（ふるさと）学習の充実を目指した事業を実施した。

子どもたちのふるさとを大切にする心情を育むとともに、地域住民の協働活動支援の輪が広がり、より深い地域理解が得られた。



ふるさと学習の様子

▶ 広報

通常の学校だよりのほか、特別号として、「地域連携だより」を地区内全戸に年2回配布し、本事業の概要や活動計画などの学校の取組、地域ボランティアの紹介、「稲葉ふるさと学習」の様子などの情報を提供した。地区内全戸に配布することで、地域住民に地域学校協働活動の様子や地元の魅力について、周知することができた。また、協働活動を推進するに当たり、地域全体で子どもたちを育てようとする気運の醸成につながった。

連携推進のポイント

- ・児童の人間性や主体性を育むための、6年間の見通しをもった計画的な協働活動とすること。
- ・継続的な協働活動となるよう、地域住民が主体的に地域人材・地域資源の継承を担っていくこと。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

小山市立小山中学校

支援のねらい・目指す姿

- ・「地域学校協働活動」の趣旨について、全教職員で共通理解を図るとともに、地域学校協働活動を推進するための体制を整備する。
- ・本校で実施している地域学校協働活動を中学校区に広げ、小中一貫教育と関連させながら小山中学校区で設定している目指す児童・生徒像の実現に迫る。

会議・支援チーム構成

- ・連携推進会議委員 6名
- ・連携会議委員 8名
- ・学校と地域の連携支援チーム員 5名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

コミュニティ・スクールとしての地域における学校の役割、また、地域学校協働本部がどのように関わっていけば良いか協議した。

学校や地域学校協働本部が「何ができるか」という議論ではなく、「何がしたいか」という議論をしていくことの必要性を理解した。



モデル校での連携会議

▶ 連携事業

地域学校協働本部や市商工会議所の協力により、小山中学校出身者も含めた、地域で活躍する様々な職種の19名に講師として来校していただき、「職業人に聞く」という授業を総合的な学習の時間で実施した。

生徒にとって、「地域のために」という思いを抱く機会となった。また、講師側（大人）には、地域住民として次代を担う中学生のために貢献しようとする意識の高まりが見られた。



理美容師体験

▶ 広報

1年に4回、コミュニティ・スクール通信を各自治会に配布し、学校運営協議会の協議内容の紹介や地域ボランティアの活動、生徒との交流活動、授業支援などの様子について写真等を交え情報提供をした。

コミュニティ・スクールの活動を紹介することで、地域の方々の協力を得られたり、次年度の活動への更なる協力を仰げたりするなど、地域全体で生徒を育てようとする気運が高まった。

連携推進のポイント

- ・新しい取組を立ち上げるのではなく、今実践している取組を更に充実させること。
- ・地域学校協働活動の趣旨について、教職員、協働活動に関わる方々全体で共通理解を図ること。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

さくら市立熟田小学校

支援のねらい・目指す姿

- ・既存の学校支援の仕組みを基盤とし、保護者・地域住民との連携・協働の組織作りの促進を図る。
- ・熟議をとおして、学校と地域の目標共有や多様なネットワーク・活動づくりを支援する。

会議・支援チーム構成

- ・連携推進会議委員 10名 ・連携会議委員 13名 ・学校と地域の連携支援チーム員 7名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

連携会議では、既存の地域学校協働活動である「星空映画会」の開催に向けて協議をした。また、研修では学校職員と地域の方が「地域で育てたい子どものすがた」というテーマで熟議を行い、課題を共有した。

熟議では、共有したビジョンの実現に向けて、課題を明らかにして具体的な行動を考えることにより、参加者の当事者意識を高めた。



モデル校での研修の様子

▶ 連携事業

地域のボランティア団体「地域子どもプロジェクトS・S（スモールシード）」や「さくらウインドアンサンブル」、地元消防団と学校が連携・協働し「星空映画会」を実施した。

学校と地域ボランティア団体の役割分担を明確にして、準備・運営をすることができた。地域住民が積極的に事業に参画し、「学校を核とした地域づくり」の意識が高まった。



星空映画会

▶ 広報

『これからの学校と地域』というタイトルで広報紙を発行し、連携事業に向けた会議の様子や熟議研修の内容、学校の取組などについて紹介した。熟田小学校区全戸（約900戸）及び市内の全小中学校の教職員に配布した。

行政区単位の回覧板を活用することで、学校と地域の連携事業について広く周知することができた。

連携推進のポイント

- ・地域全体で子どもたちの学びや成長を支えることは、地域の人間関係構築につながっていること。
- ・今までの学校と地域の関係性を大切にしていくこと。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

那珂川町立馬頭東小学校

支援のねらい・目指す姿

- ・既存の学校支援の仕組みを基盤とした連携・協働の組織づくり、校内体制の支援を行う。
- ・熟議をとおして、学校と地域の目標共有や多様なネットワーク・活動づくりを支援する。

会議・支援チーム構成

- ・連携推進会議委員 10名
- ・連携会議委員 11名
- ・学校と地域の連携支援チーム員 6名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

連携会議では、「地域でどのような子どもを育てていくのか」という『子ども像』を共有し、そのビジョンの実現に向けて地域と学校が協働して何ができるのかを協議した。

熟議の有効性を認識するとともに、地域と学校の双方向の関係づくりの重要性について共通理解を図ることができた。



連携会議（熟議）の様子

▶ 連携事業

地域人材を生かし、学校支援ボランティアを積極的に活用することで、学校に対する多様な支援活動を実施した。生活科や総合的な学習の時間等では、様々な職種の学校支援ボランティアの協力により学習内容が充実した。

地域住民のボランティア志向や、地域の子どもは自分たちで育んでいこうという意識の高揚が見られた。



読み聞かせの様子

▶ 広報

『これからの学校と地域』というタイトルで広報紙を発行し、コミュニティ・スクールや熟議研修の内容、学校の取組などについて紹介した。広報紙は、馬頭東小学校区全戸（約 600 戸）及び町内全小中学校の教職員に配布した。また、学校ホームページに「コミュニティ・スクールのコーナー」を設け、情報を随時発信している。

行政区単位の回覧板を活用することで、学校と地域の連携事業について広く周知することができた。

連携推進のポイント

- ・学校と地域が連携協働の必要性を理解し、問題解決に向けて当事者意識を醸成していくこと。
- ・地域学校協働活動では既存の活動を継続できるように大切にしていけること。また、活動の質を高めていくこと。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

大田原市立湯津上中学校

支援のねらい・目指す姿

地域の一員としての自覚をもち、主体的に地域活動に参画できる生徒を育むために、生徒が地域のよさや地域とのつながりを実感できるような地域学校協働活動を実施する。

会議・支援チーム構成

・連携推進会議委員 5名 ・連携会議委員 3名 ・学校と地域の連携支援チーム員 3名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

地域連携マイスターから「地域を知り、地域に参画することをとおして、地域に対する愛着が育まれる。」との助言を得て、本地区の地域資源（ヒト・モノ・コト）との連携・協働により、既存の活動を拡充するために必要な方策について協議した。

また、学校と地域が同じ思いをもって取り組むことが、学校と地域の連携・協働の推進につながるとの認識のもと、生徒・教職員・保護者・地域住民等が一堂に会する場を利用して「学校と地域の連携」をテーマに研修会を実施した。



連携会議の様子

▶ 連携事業

コロナ禍においても、「学校と地域の連携・協働」を推進しようと工夫した。例えば、高齢者宅訪問を、手作りマスクと絵手紙を贈る活動に変更することで間接的に交流を図ったり、リモートで講話を聞いたり、地域の歴史的文化財を生かした屋外での活動や生徒による地域貢献活動等を実施したりした。

活動をとおして、生徒たちは地域のよさや地域とのつながりを実感することができ、地域への参画意識の向上につながった。



こも巻きの様子

▶ 広 報

那須教育事務所が発行している「ふれあい学習情報紙『まなびの広場』」の紙面の一部に、「頑張る学校・地域！応援プロジェクトコーナー」として記事を掲載し、学校の取組について紹介した。那須地区管内の市町教育委員会・学校・公民館等に配布することで、広く周知することができた。

連携推進のポイント

- ・既存の活動を見直し、地域コーディネーターや市生涯学習課等と密に連携し、地域学校協働活動を充実させること。
- ・生徒の思いを生かした活動を実施することで、主体性を育むこと。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

那須塩原市立大貫小学校

支援のねらい・目指す姿

学校統合後も、学校と地域の連携・協働関係を持続可能なものにするための素地づくりを目指し、地域資源（ヒト・モノ・コト）を生かした地域学校協働活動を実施する。

会議・支援チーム構成

・連携推進会議委員 4名 ・連携会議委員 4名 ・学校と地域の連携支援チーム員 4名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

本校は令和5年度に箒根中、関谷小、横林小と統合し、義務教育学校「箒根学園」となる。そこで、学校と大貫地区が遠い存在にならないよう、統合後も大貫地区との関係性を持続させたいと考え協議を続けてきた。

また、学校統合により地域との連携・協働関係を再構築した山形県小国町の事例から、「閉校後の可能性を探る」ことができた。



研修「閉校後の可能性を探る」
(web 会議ツールを活用)

▶ 連携事業

統合を見据え、以前から3小学校合同で学習活動を実施しており、その一環として、本校を会場に「おはぎ作り体験」を行った。おはぎ用の米は、米作りが盛んな大貫地区の米を使用し、講師は大貫地区の住民が務めた。

子どもたちにとっては、活動をとおして大貫地区の特色を理解することにつながり、講師を務めた地域住民にとっては、大貫地区以外の子どもたちと交流する良い機会となった。



おはぎ作り体験

▶ 広 報

那須教育事務所が発行している「ふれあい学習情報紙『まなびの広場』」の紙面の一部に、「頑張る学校・地域！応援プロジェクトコーナー」として記事を掲載し、学校の取組について紹介した。

那須地区管内の市町教育委員会・学校・公民館等に配布することで、広く周知することができた。

連携推進のポイント

- ・大貫地区の特色を生かした、統合する3小学校合同の地域学校協働活動を実施すること。
- ・地域学校協働本部や地域学校協働活動推進員と連携し、統合後に向け、地域との連携・協働関係構築の素地づくりをすること。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

佐野市立葛生小学校

支援のねらい・目指す姿

令和 5 年度に開校する葛生義務教育学校に学校運営協議会と学校地域応援団（地域学校協働本部）を導入するため、教職員や学校支援ボランティアのコミュニティ・スクールと地域学校協働活動への理解促進を図るとともに、地域コーディネーターの人選を進めるなど素地づくりを行う。

会議・支援チーム構成

・連携推進会議委員 20 名 ・連携会議委員 11 名 ・学校と地域の連携支援チーム員 6 名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

学校と地域の連携・協働の必要性に関する協議、モデル校における校長の経営方針の具現化に向けた連携活動の協議を行った。

また、地域連携マイスターによる学校支援ボランティア及び管理職、教職員対象の研修を開催した。

会議をとおして、地域が学校の方針を理解して教育活動を支援することの大切さ等を確認することができた。また、研修をとおして、協議会の役割や意義等について理解を深めることができた。



教職員対象の研修

▶ 連携事業

モデル校では初の地域コーディネーターを選任し、コロナ禍においても実施可能な地域連携活動を検討し、地域コーディネーターを介した教育活動への支援を実施した。

地域コーディネーターを介して、学校支援ボランティアによる「読み聞かせ」「生活科の町探検の補助」「家庭科のミシン・手縫いの補助」「吹奏楽部の指導」を実施し、地域の教育力を活用した教育活動の重要性を再確認できた。



5年生 家庭科 手縫いの補助

▶ 広 報

学校運営協議会と学校地域応援団の期待される効果、本事業での取組、地域コーディネーターの紹介等を記載したリーフレットを作成し、当該地域住民、全教職員に配布した。

最も理解と協力を深めたい地域に全戸配布をして周知を図ったことで、学校運営協議会等について広く知らせることができた。特に、各小学校区で選任された地域コーディネーターを紹介したことで、地域への周知の実現とともに学校支援への興味・関心の喚起につながる手応えを感じた。

連携推進のポイント

- ・教職員、地域コーディネーター、ボランティア等の理解促進を図る研修・啓発の充実を図ること。
- ・一からつくるということではなく、既存の連携・協働活動等を学校運営協議会と学校地域応援団の枠組みの中に位置付けていくこと。

学校と地域の連携推進モデル事業実践校

足利市立東山小学校

支援のねらい・目指す姿

教職員と地域の支援者が共に学校と地域の連携・協働について学び、理解を深める。また、「顔が見える」関係づくりを促進することによって、双方の思いや考えを踏まえて交流し合い、信頼関係を築くとともに、地域全体のつながりを深める。

会議・支援チーム構成

・連携推進会議委員 14名 ・連携会議委員 14名 ・学校と地域の連携支援チーム員 7名

取組の概要・効果

▶ 会議・研修

東山小学校の子どもたちの健やかな成長のため「東山小学校応援隊充実のための3か条」について、教職員と地域住民が、小グループになり、協議した。

地域と学校がパートナーとして連携するための方策や、「協働」について共通理解を図ることができた。



連携推進会議の様子

▶ 連携事業

新型コロナウイルス感染症対策を講じた上で、図書館ボランティアや読み聞かせボランティア、市独自の放課後子ども教室等、既存の活動を実施し、加えて本年度から「1年生の生活支援」を実施した。

特に「1年生の生活支援」では、ボランティアの活躍により、地域の教育力を生かした教育活動の重要性を再確認することができた。



校内研修の様子

▶ 広 報

校内研修の様子や、そこで出された意見、地域の方々のボランティア活動の様子、学校と地域の連携・協働についての説明等を記載したリーフレットを作成した。

東山小学校の保護者に配布し、本事業の周知を図った。また、公民館だよりを活用することで、広く地域住民への周知を図ることができた。

連携推進のポイント

- ・新しいことを始めるのではなく、既存の組織・活動を今後も続けていくこと。
- ・地域全体のつながりを深めるため、教職員と地域が顔が見える関係づくりを促進すること。